

だまされた娘とちょうの話

小川未明

青空文庫

弟妹の多い、貧しい家に育つたお竹は、大きくなると、よそに出て働かなければなり
 ませんでした。

日ごろ、親しくした、近所のおじいさんは、かの女に向かつて、

「おまえさんは、やさしいし、正直であるし、それに、子供が好きだから、どこへい
 つてもかわいがられるだろう。うらおもてがあつたり、じゃけんだったりすると、きらわ
 れて出世の見込みがないものだ。東京へいったら、からだを大事にして、よく働
 きなさい。」と、希望のある言葉を与えてくれました。

方々で桜の花の咲きはじめてころでした。お竹は、故郷に別れを告げたのでありま
 す。

もう、こちらへきてから、だいぶ日数がたちました。かの女は、朝早く起きると、食
 事の仕度をし、それが終わると、主人のくつをみがき、また縁側をふいたりするの
 でした。

奥さまのへやには、大きな鏡が置いてありました。そうじをするときには、自分の姿が、
 その氷のように冷たく光るガラスの面にうつるので、つい知らず、手を頭へやって、髪

形^{たち}を直^{なお}したのです。

あちらで、それを見^みた奥^{おく}さまは、女^{おんな}はだれでも、鏡^{かがみ}があれば、しぜんに自分^{じぶん}の姿^{すがた}を写^{うつ}て見る^みのが、本^{ほん}能^{のう}というこ^{こと}を知ら^しなそうに、

「ひまなときは、いつでもここへきてお化粧^{けしょう}をして、いいんですよ。」と、わざとらしく、お竹^{たけ}に、いいました。

お竹^{たけ}は、さもとがめられたように顔^{かお}を赤^{あか}くして、なんと返^{へん}事^じをしていいかわからず、ただ、下^{した}を向^むきながら仕^し事^{こと}をするばかりでした。

奥^{おく}さまは、つづけて、いいました。

「前^{まえ}のねえやは、それは、顔^{かお}もよかつたし、気^きがきいて、役^{やく}にたつ子^こでしたが、器^{きり}量^{りょう}がご自^じ慢^{まん}なので、ひまさえあれば、鏡^{かがみ}に向^むかつて、ほお紅^{べに}をつけたり、おしろいはけでたいたりするので、なにもお嬢^{じょう}さんじゃなし、パンパンでもあるまいから、気^きの毒^{どく}だけれど、いつてもらったんですよ。」と、さも、おかしいこ^{こと}を話^{はな}すように奥^{おく}さまは、笑^{わら}ったのでした。

あまり、その調^{ちよう}子^しがくだけでいて、自分^{じぶん}に対^{たい}する皮^ひ肉^{にく}とはとれなかったので、お竹^{たけ}は、前^{まえ}にいた女^{じょ}中^{ちゆう}のこ^{こと}だけに、ついっりこまれて、

「そんなに、きれいな方かたなんですか。」と、奥さまの方ほうを見て、たずねました。
しかし、奥さまのようすは、さつきの笑わらいとは似につかず、冷ややかでした。

「ええ、それは、顔かおがきれいなばかりでなく、お料理りようりだって、なんでもできたんです。」
と、そつけなく答こたえた、奥さまの言葉ことばには、おまえのような、田舎出いなかでとちがうという、さげすみの意味いみがあらわれていました。

さすがに、人のいうことを、まっすぐにしか解かいしなかったお竹たけも、底意地そこいじのわるい、奥さまのいい方かたがわかつて、もうなにもいうことができませんでした。しかし、そこを立ち去さりがけに、自分の顔かおは、そんなにみにくいのであるかと、つい鏡かがみの方ほうを見向みむかずにいられませんでした。

あわれなかの女じよには、まだ台所だいどころでたくさん仕事しごとが待まっていました。それをかかえると、かの女じよは、外の井戸端いどばたへいききました。田舎いなかにいたときのことなど思い出しながら、せわしように、ポンプで水を汲みずくみ上げ、たらいの中で手てを動うごかしたのです。

そこへ、隣となりの奥さんおくが、バケツを下さげてきました。お竹たけは、あわてて、たらいを片かたすみへ押おしのけようと思いました。

「ああ。いいんですよ、そうしておいてください。私は、水みずを一杯ぱいいただければ、いいんで

すから。あなたは、よくご精^{せい}がでますわ。」と、その奥^{おく}さまは、じよさいがなかったのでした。

自分^{じぶん}の心^{こころ}に、まじりけがなかったから、こうやさしくいわれると、お竹^{たけ}は、この奥^{おく}さんのほうが、うちの奥^{おく}さまより、よつぽど、いい人^{ひと}のように思^{おも}いました。そして、すぐ、打ち^うちとける氣^きになったのです。

「前^{まえ}のお女^{じょ} 中^{じゅ}さんは、たいへんきれいな方^{かた}だつて、そうですか。」と、かの女^{じょ}は、耳^{みみ}まで赤^{あか}くしながら、ぶしつけに聞^ききました。奥^{おく}さんは、びつくりしたふうもせず、

「ふつうではありませんか。あの方は、ここはお給^{きゆう}金^{きん}が安^{やす}いから、といつていました
が。」と、答^{こた}えました。

その後^ご、まもなく、お竹^{たけ}が、口^{くち}入^いれ屋^やの世^せ話^わで、ある私^{しり}立^つ病^{びよう}院^{いん}の病^{びよう}室^{しつ}にいた、
子^こ供^{ども}の付^つき添^そいとなつたのも、どうせ勤^{つと}めるなら、すこしでも国^{くに}へ送^{おく}るのにお金^{かね}の多いほ
うがいいと思^{おも}つたからでした。

外^{そと}から見^みると、宏^{こう}壮^{そう}な洋^{よう}館^{かん}造^{づく}りの病^{びよう}院^{いん}でしたけれど、ひとたび病^{びよう}棟^{とう}に入^{はい}つ
たら、どのへやにも、青^{あお}白^{しろ}い顔^{かお}をして、目^めの落^おち込^こんだ病^{びよう}人^{にん}が、床^{とこ}の上^{うえ}で仰^{ぎやう}臥^がす
るもの、すわつてうめくもの、笑^{わら}い声^{こゑ}ひとつしなれば、長^{なが}い廊^{ろう}下^かを歩^{ある}く足^{あし}音^{おと}ぐらいの

ものでした。あのいきいきとしたにぎやかな町まちからきたものには、まったく別の世界べつ せかいであると感じかんられなかったのです。いわば、ここは、病人びょうにんだけがいるところであり、健康なもののじつとして、いられるところではありませんでした。

「ああ、いくらお金かねになっても、私のくるところでなかった。これにくらべれば、たとえ口くちやかましい奥さまおくの家いえでも、がまんできたのに。」と、お竹たけは、ぼんやりとして後悔こうかいにくれたのです。

「ねえ、おねえちゃん、なにを考かんがえているの。なにかおもしろいお話はなしを聞きかしてくれない。」と、そばにねている少年しょうねんは弱々よわよわしい声こえで、人なつこくいいました。

もう、長く入院にゅういんしているの、少年しょうねんはやせて、年としよりも幼おきなく見えるので、かの女じよには、いじらしかったのです。

「坊ちゃん、さびしいの。」と、お竹たけは顔かおを寄よせるようにして、聞ききました。

「もう、おねえちゃんがいるから、ぼく、さびしくないよ。」と、少年しょうねんは、さもはずかしそうにして答こたえたのです。

「私は、坊ちゃんぼっが、よくおなおりなさるまで、どこへもいきませんよ。」

こういうと、少年しょうねんは、脊椎せきついカリエスで、とうてい助たすかる見込みみこがないと、回診かいしん

の医者はいっていました。

同じ場所おなばしょで、おとなにも氣きの毒どくな患者かんじやがいました。別に付き添つそいがいないので、不ふ自じ由ゆうするのを見みると、お竹たけは、そんな人ひとには、できるだけのしんせつをしたのでした。便べん

所よへつれていたり、また夜中よなかにまくらの氷こおりをとりかえてやったりしました。なかには、

「じょうぶなときとちがい、こんなからだになつて、ひとさまから、やさしくしてもらいますと、ありがたくて、ほんとうに恩おんにきますよ。」と、手てを合あわさんばかりにするものもありました。こういわれると、日ひごろ氣き立てのやさしいお竹たけは、自分じぶんのできることは、

どんなことでも、してやらなければならぬという氣持きもちになるのでした。

ある日ひのこと、古ふるくから、この病びょう院いんへ出で入いりして、炊事婦すいじふや看護婦かんごふと、顔見知かおみしりという老ろう婆ばが、ふいに、お竹たけのもとへやつてきて、前まえに約やく束そくがあるのだから、少しょう年ねんの付つき添そいを代かわつてもらいたいといいました。

「だしぬけで、お氣きの毒どくですけれど、ほんとをいうと、あんたのような、若わかい、きれいな方かたは、こんなところにいるものでありませんよ。どんなにお屋敷やしきでも、また、キャバレ―でも、おもしろくて、お金かねになるところがいくらもあるではありませんか。私わたしのような、おいぼれは、いくところがないから、しかたなしにこんな藥くすりくさい、陰氣いんきなところにいる

けれど、私^{わたし}だつて、若^{わか}ければ、一日^{いちにち}だつてがまんできやしない。」と、老婆^{ろうば}は、もつともらしくまくしたてました。

けれど、お竹^{たけ}は、少年^{しょうねん}がなんというだろうかと、その方^{ほう}を見^みましたが、老婆^{ろうば}とは、かねて知^しり合^あいとみえて、だまつていたので、いまさらこの病^{びょう}院^{いん}に未^み練^{れん}のあるはずがなし、その日^ひのうちに、暇^{ひま}をとつて出^でることにしました。

かの女^{じよ}は、老婆^{ろうば}が、自分^{じぶん}を美^{うつく}しいといつたのが、いつまでも頭^{あたま}にあつて、けつして、わるい氣^きがしませんでした。また口^{くち}入^いれ屋^やへいくにしても、髪^{かみ}形^{かたち}がきれいであれば、いっそう、いいところへ世^せ話^わをしてくれるにちがいないと考^{かん}えて、かねて、一度^ど入^いつてみたと思^{おも}つた、美容^{びよう}院^{いん}を歩^{ある}きながらさがしました。

たまたまあつた、美容^{びよう}院^{いん}の扉^{とびら}を押^おして内^{うち}へ入^{はい}ると、室内^{しつない}は、いい香^かりがただよい、花^{はな}の乱^{みだ}れるように、美^{うつく}しい娘^{むすめ}たちが、あふれるばかり集^{あつ}まつていました。かの女^{じよ}は、顔^{かお}がぼうつとしたが、だんだん、おちつくと、ひとりひとりの、美^{うつく}しい顔^{かお}を見^みたのでありまし
た。そして、心^{こころ}ひそかに、

「さつきまでいた病^{びよう}院^{いん}と、こことのありさまは、なんというちがいだろう。」と、つぶやかずにいられませんでした。

そのとき、季節はずれの、大きな黒いちようが、どこから迷いこんだものか、ガラス窓につき当たって、しきりと、出口をさがしていました。

「かわいそうに、花園と思つて、香水や、電氣にだまされたんだわ。」

かの女は、まだ自分が、ちようど、そのちようであることに気がつきませんでした。

思いのほか、電髪に手間どられて、外へ出たときは、いつしか西の方の空が、わず

かに淡紅色をして、日が暮れていました。平常、むだづかいをせずのためにいた

金があるので、これから、宿屋で泊まろうと、すでに顔なじみの口入れ屋へいこうと、そ

の心配はないけれど、さすがに心細く思いました。病院で、少年に田舎の

話をしたら、

「ぼくは、そんなほたるが飛んでいたり、魚の釣れる川のあるところが大好きだ。なぜ、

おねえちゃんは、こんなやかましい町の中が好きなの。」と、ふしぎそうにいったことな

ど、思い出されました。やがて、大通りへ出ようとすると、路地の片すみに、ちようち

んをつけた、易者のいるのが、目に入りました。

そのちようちゃんには、手相、身の上判断と書いてありました。かの女は、それを見る

と、同じ道を往来して、いくたびかためらったが、ついに、そのほうへと近づきました。

手相てそうを見てくれるのは、まだ若者わかものだったが、若者わかものは、一目ひとめで、かの女じよを田舎いなかから出でて、まだ間まのないものだと思いしました。さながら、あひるが、化粧けしょうしたような歩きあるつきや、ただ、流行りゆうこうをまねさえすれば、美しく見みえるとも思おもっている、けばけばしくて、あかぬけのしないようすが、若者わかものにはかえってあわれみをそそったのでした。

「身みの上うへご相談そうだんですか。右みぎのほうの手てをお出だしください。」

はずかしそうにして出だす、お竹たけの手てを、掌てのひらから、つまさきまで、若者わかものは、うす暗ぐらい提ち燈ようちんに照てらしながら、虫眼鏡むしめがねでこまかにながめていたが、やがて、顔かおを上げると、

「あなたは、正直しょうじきですから、ひとにだまされやすい。よく、よく、用心ようじんしなければなりません。」

お竹たけは、心こころの中で、これと同じようなことを田舎いなかで、近所きんじよのおじいさんがいったが、あのときは、正直しょうじきだから、おまえは人ひとにかわいがられるといった。都会とかいでは、どうして、反対はんたいなのだろうか、と、考かんがえながら、その後あとを聞きくと、

「年としまわりがわるいので、これから先さきに大損おおそんをなさることがある。お金かねばかりでなく、身みの上うへにも、よくよく氣きをつけないければなりませんぞ。いま、お国くにのほうでは、あなたに結けつ婚こんの話はなしが持もち上あがっています。だが、あなたは、あとではたいへんしあわせになられ

ます。

かの女は、顔を赤くして、幾たびも頭を下げて、その前をはなれました。

若い易者は、彼の先生から、いかなるばあいでも、相手に希望を持たせることを忘れてはならぬといましめられた、その教えを実行したまでです。

自分は、田舎へ帰れば、また、みんなから、やさしい、正直な子だといって、ほめられるだろうと、お竹は道を歩きながら、思いました。

ちようど、このとき、一時も早くかの女に出発をすすめるように、どこかの駅で鳴らす汽車の汽笛の音が、青ざめた夜空に、遠くひびいたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「小学六年生 4巻2号」

1951（昭和26）年5月

※表題は底本では、「だまされた娘《むすめ》とちようの話《はなし》」となっています。

※初出時の表題は「だまされた娘と蝶の話」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

だまされた娘とちょうの話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>